

〔1〕日本語には「ま行のm音」と「ば行のb音」が入れ替わっても、意味の変わらない言葉が一杯ある。そしてそれらの言葉には、奈良時代から使われていると見られる古い言葉も多い。

では、そういった言葉を拾い出してみると。

(1) 先ず、『日本書紀』と『古事記』を見ると、四つ出てくる。

i. 「とめ、tome」と「とべ、tobe」

いしこりとめ（伊斯許理度賣）『古』

いしこりとめ（石凝姥）

『紀』神代紀「第7段」一書第一

いしこりとべ（石凝戸辺）『紀』神代紀「第7段」一書第三

天の石窟（いわや）に天照大神が隠れた時、神々が集まって、どうやって呼び出そうかと算段する。その時、鏡を作る役を仰せ付かった冶工（たくみ）が「いしこりとめ」である。「いしこり(石凝)」とは、「石のように硬く凝り固まる」ことを意味しており、思うに、「良い鏡を造る」という意を、「石のように硬い鏡を造る」という形で表現したのであろう。この「石凝り」に、女性を表す古い言葉の「とめ」、あるいは「とべ」を付けて、匠の名としたのである。

「～とめ」と「～とべ」は、「～媛」といったところでしょうか。

ii. 「とみ、tomi」と「とび、tobi」

『古事記』に言う「登美（とみ）」的那賀須泥毘古の本拠「登美」について、『日本書紀』神武紀には、「鵲（とび）の邑」と号く(なづく)、今「鳥見（とみ）」と云ふ、とある。奈良盆地東南部の三輪山の南に「鳥見山」（とみやま）がある。その鳥見山の北麓、三輪山と向き合う山麓の村を今も「外山（とび）」と言う。ここに前期巨大古墳の桜井の茶臼山古墳がある。バス停があり、「外山」と書いて「とび」と仮名が振ってあった。今もこのバス停がある。

iii. 「ま、ma」と「ば、ba」『記紀』で最も有名な歌と言え、倭（やまと）は国のまほらま豊（たたな）づく 青垣(あをかき)山籠(やまごも)れる 倭(やまと)し麗(うるは)しであろう。これは、『書紀』にある歌で、景行天皇が日向に遊んだ時、京都（みやこ）を偲んで歌ったことになっている。『古事記』にも同じ歌があり、こちらは、倭建（やまとたける）が蝦夷を征服した帰り、亡くなる前に国を偲んで歌ったことになっている。

『古事記』では『書紀』の「まほらま」が、「まほろば」になる。「まほらま」も、「まほろば」も、歌の意味からすれば、（国の中心）、（国中で一番良い処）という感じになる。初めの「ま」は、（真に）の意味。後ろの「ま」は「間」、「ば」は「場」で、いずれも（処）の意味である。であれば、「ほら」と「ほろ」も同じ意味となろう。私は、

「ほら」と「ほろ」は、《古朝鮮語の「hol」・古満州語の「holo」、（山の谷）の意味》から転化した語で、（洞穴）の意味となり、それから、（空洞の中）、（真中）、（大事な処）、（良い処）の意味が派生したと考えている。現代語の「ほら」は（洞穴、木に空いた穴）、「ほろ」は（幌）の意に用いられる。

さて、日本人は大陸のh音の語を受け入れるとき、日本語のh音の語としてだけでなく、k音の語としても受け入れている。こうした発音習慣から、《古朝鮮語・古満州語の「hol」・「holo」》は、h音の「ほら」・「ほろ」だけでなく、k音の「くら」にも転じたと見られるのである。「ほら」は（自然の洞窟）の意、「くら」は（人工の倉）の意だから、両者には（周囲を物で囲われて中が空洞、そして暗い）という《共通キー》がある。ここに両者を同根の語と見る蓋然性が生まれる。

そして、「まほら」に（大事な処）の意味があるように、「まくら」にも、大事な物である（頭）を置く（枕）の意味がある。古語の「まくらへ（頭辺）」は（頭の辺り）の意味だから、「まくら」にも本来、（大事な物）、（頭そのもの）の意味があったと言えるようである。

佐賀県の伊万里市では、黒曜石のことを「カラスンマクラ」という。

「ン」は格助詞の「ノ」が約まったものだから、この場合の「マクラ」は、文字通り、真っ黒けの「カラス」の真っ黒けの（枕）の意に取れるが、（最高に大事なもの）の意であるとも取れる。黒曜石は縄文時代における（最大の宝）だからである。

「ま」と「ば」に戻る。

「ま」は漢字で書けば「間」、「ば」は「場」。「ま」も、「ば」も音読みのように見えるが、どちらも訓読みである。つまり、倭語である。「間」の音読みは、呉音で「ケン」、漢音で「カン」。「場」の音読みは、「ジョウ」。倭語の「ま」は、こことこの間（あいだ）、（このあいだの場所）という意味である。

「ま ma」（間）と、「ば ba」（場）は、《m音とb音が入れ替わっただけの同じ意味の倭語》だったのである。しかし言語学者の説としては聞いたことがない。

iv. 「あむ、amu」と「あぶ、abu」

『紀記』に、雄略天皇の同じ歌がある。天皇が狩りに出かけ、床机に座っていると蛇が飛んできて腕に喰いつく。すると、「蜻蛉（あきつ）」が飛んできてこの蛇を食う〔蜻蛉は「とんぼ」のこと、「とんぼ」の言葉の方が新しい〕。そこで天皇は、倭では「蜻蛉」までが天皇の身を案じていると、この「蜻蛉」を誉めた。それから、倭のことを、「蜻蛉島倭（あきづしまやまと）」と言うようになった、というかなり無理のあるお追従ついでしょうの歌なのである。

さて、『古事記』に「あむ（阿牟）amu」とある処、『日本書紀』は本文に「蛇」の漢字を使い、歌には「阿武」の万葉仮名を使っている。『日本書紀』も歌は全て万葉仮名で

書き、全て漢音で読む。「阿武」の「武」は呉音で「む」、漢音で「ぶ」である。であれば、「阿武」も「虻」も、「あぶ」と読むべきことになる。ここから、「あぶ（虻）abu」を、「あむ（阿牟）amu」とも言ったと分かるのである。

『日本書紀』の歌の原文には「阿武」の漢字が使われているが、
『岩波書紀（日本古典文学大系本の「日本書紀」）』は原文の「阿武」の漢字を「虻」に書き換え、この「虻」に「あむ」の仮名を振っている。
『岩波書紀』はここで二重の誤りを犯している。原文の漢字の書き換えは誤解を招くし、原文の「阿武」は漢音で「あぶ」としか読まない。

それでは『記紀』の《m音とb音の交代現象》について纏まとめる。この現象は、700年代の初頭に編纂された『記紀』の時代から見られる。「～とめ」と「～とべ」の語など、『書紀』の編者も、その本来の語意を忘れていくほどに古い、ということである。

（２）次に、『記紀』に限定せず、古語や、現代語から、《m音とb音が入れ替っても意味の変わらない言葉》を拾い出してみる。なお、同じ語根の語は主用語のみを挙げた。

i. 名詞

- （皇）すめら すべら
- （天皇）すめらぎ すべらぎ
- （天皇）すめろぎ すべろぎ
- （皇尊）すめらみこと すべらみこと（以上四つとも、天皇のこと）
- （皇睦）すめむつ すべむつ〔天皇の親族〕
- （皇御祖）すめみおや すべみおや〔天皇の祖先、祖母〕
- （皇御孫）すめみまご すべみまご〔天皇の直系の子孫〕
- （采女）うねめ うねべ
- （蝦夷）えみし えびす
- （鵜鵜）かいつむり かいつぶり
- （蝸牛）かたつむり かたつぶり
- （冠）かむり かぶり
- （禿）かむろ かぶろ〔禿げのこと〕
- （神ろき）かむろき かぶろき〔神様のこと〕
- （冠）こうむり こうぶり
- （侍）さむらひ さぶらひ
- （耳目）じもく じぼく〔
- （じもく）上代～、
- （じぼく）中世～〕
- （蟬）せみ せび
- （頭）つむり つぶり
- （合歡）ねむ ねぶ〔ネムノ木〕

(蝮) はめ はぶ (波浮)

(紐) ひも ひぼ

(神籬) ひもろぎ ひぼろぎ [神様の依り代]

(蛇) へみ へび

以上を整理すると、

〔天皇そのもの、そして天皇の一族、祭祀(さいし)・儀式にかかわる語〕に見られる。ということは、奈良・平安の社会の最上層部でも、この《m音とb音の入れ替わった言葉》を用いていたということである。これも重要なポイントである。

(頭)・(禿、はげ)・(蟬)・(蛇)などは、〔身近な生活に直結する語〕に分類できる。

ii. 形容詞 動詞 他

(危ない) あむない あぶない

(煙い) けむい けぶい

(寒い) さむい さぶい

(冷たい) つめたい つべたい

(乏しい) ともしい とぼしい

(眠い) ねむい ねぶい

(浴む) あむ あぶ

(怪しむ) あやしむ あやしぶ

(歩む) あゆむ あゆぶ

(辞む) いなむ いなぶ

(俯く) うつむく うつぶく

(産む) うむ うぶ [うぶ(初)は名詞、うぶな奴]

(思ほす) おもほす おぼほす

(傾く) かたむく かたぶく

(軽む) かるむ かるぶ [軽く見る]

(苦しむ) くるしむ くるしぶ

(叛く) そむく そぶく

(楽しむ) たのしむ たのしぶ

(賜う) たまふ たばふ

(富む) とむ とぶ

(尊む) たふとむ たふとぶ

(戯る) たわむる たわぶる

(瞑る) つむる つぶる [目、口をつむる、つぶる]

(訪う) とむらふ とぶらふ

(弔う) とむらふ とぶらふ

(灯す) ともす とぼす

(隠る) なまる なばる [隠れる]

(舐る) ねむる ねぶる [舐める]

(葬る) はふむる はふぶる (暫し) しまし しばし
(並て) なめて なべて [並(なら)べて、
『紀』 盾なめて]
以上、

〔身近な、生活に直結する語〕に見られる。ということは〔社会の階層に関係なく使われた〕。これも重要なポイントである。しかも、〔現代では使わない古い言葉〕、(思・おもほす)・(賜・たまふ)・(隠・なまる)などがある。他の言葉のm音とb音の双方の読みとも、〔奈良・平安・中世の昔から使われている古い言葉〕ばかりである。これは、『記紀』にも見られた重要なポイントである。なお、m音とb音の一方が、中世以降にしか見られないものも多数ある。

以上の《m音とb音の音節の入れ替わり》以外に、日本語でこのように《音韻が入れ替わる現象》は、他に無いのではなかろうか。この現象は、《日本語における特異な音韻現象》と言っていい。先に、《h音とk音の交代するものがある》ことに触れたが、こちらも日本語の形成期に見られる興味深い現象である。

以上の実態を明らかに出来たところで、次の問題、というより根本の問題、《何でこのような現象が起きたのか?》を考えてみる。

〔 2 〕 m音とb音交代の原因

(1) 日本人の発音習慣

《江戸っ子は、「ひ」と「し」の区別が出来ない》と聞く。また、《東北地方では、「し」と「す」を区別して発音出来ないし、聞き分けることも出来ない》と聞く。ラジオ・テレビで標準語が普及した現在、変わって来てはいるだろうが、今もこうした傾向の見られることは確かなようだ。

私は、この《m音とb音の入れ替わり現象》も、こういった《発音習慣》の問題であるように思う。m音のま行(ま、み、む、め、も)の音節と、b音のば行(ば、び、ぶ、べ、ぼ)の音節は、《合わせている上下の唇を開くときに発音する》ところは同じである。

しかしそうは言っても、どんなにそそっかしい人でも、「まぬけ」を「ばぬけ」とは言わないし、「ばか」を「まか」とも言わない。日本人はm音とb音をハッキリ区別して発音する。聞き違えたりしない。そして、m音がb音に入れ替わるといっても、全て一様に入れ替わる訳ではない。限られた語にだけ見られる現象である。

ということは、この《入れ替わり現象》は、《日本人の発音習慣》から来ているのではないことになる。では何故、日本語にこのような現象が見られるのだろうか?

(2) 呉音のm音と漢音のb音

日本語の漢字の音読みに呉音と漢音がある。この呉音と漢音の最も特徴的な違いが、《

呉音のm音が、漢音ではb音に入れ替わる」という現象である。

（旺文社『漢和辞典』新版、1980年版）、これから、《呉音のm音が、漢音だとb音に交替する漢字》をピックアップしたら、132文字出てきた。

m音は息が半分鼻に抜けるので鼻音と言い、b音は全部口から出すので、勢いが付いて破裂音になる。中国では、隋・唐代までに、鼻音のm音が無くなり、m音であった漢字の100%が、破裂音のb音になっている。この現象を中国では《非鼻音化現象》と言っている。さて、日本語の場合、子音と母音が一つずつセットになって一つの音節を作り、その音節が組み合わさって一つの言葉を形成する。そして母音は（あ、い、う、え、お）の5音だから、一つの子音が形成する音節の数は5つになる。

〔現代は、や行は「や、ゆ、よ」の3音節、わ行は「わ」の1音節だけになっている。〕

《呉音のm音が、漢音だとb音に交替する漢字》としてピックアップした。132の漢字の中から、《呉音・漢音、双方の読みが日本語として定着している漢字》を拾い出してみた。

呉音 漢音 呉音 漢音

- （万）マン バン 万年、万歳
- （幕）マク バク 天幕、幕府
- （美）ミ ビ 美濃、美人
- （眉）ミ ビ 眉間、白眉
- （微）ミ ビ 微塵、顕微鏡
- （武）ム ブ 武蔵、武士
- （無）ム ブ 無罪、無礼
- （母）モ ボ 雲母、父母
- （木）モ ク ボク 木目、木刀
- （目）モ ク ボク 耳目、面目

（3）呉音と漢音の違いの他の例

呉音にはもう一つの鼻音、《n音》があり、これが漢音では破裂音の《d音》になる。これについても、《呉音・漢音双方の読みが日本語として定着している漢字》を拾い出してみる。

呉音 漢音 呉音 漢音

- （内）ナイ ダイ 内外、内裏
- （男）ナン ダン 長男、男女
- （耳）ニヂ 眼耳鼻、耳鼻咽喉科
- （児）ニヂ 小児、児童
- （辱）ニク チョク 忍辱、恥辱

(若) ニャク チャク 老若、若年 (女) ニョ チョ 信女、男女
(人) ニン チン 人間、人事
(刃) ニン チン 刃傷、凶刃
(奴) ヌド 奴婢、奴隸
(怒) ヌド 憤怒、怒号

《呉音と漢音の違い》で次に顕著なのが、呉音の濁音が、漢音では清音になる《濁音の清音化現象》である。

これも例を挙げておく。

	呉音	漢音	呉音	漢音
(河)	ガ	カ	大河、	河川
(伎)	ギ	キ	伎学、	歌舞伎
(神)	ジン	シン	神武、	神仏
(臣)	ジン	シン	大臣、	臣下
(大)	ダイ	タイ	大学、	大変
(台)	ダイ	タイ	台所、	台湾
(代)	ダイ	タイ	代理、	交代
(治)	ヂ	チ	明治、	統治
(土)	ド	ト	土台、	土地
(敗)	バイ	ハイ	成敗、	敗北

この他、呉音・漢音の違いには、《韻母の母音が変わる例》が多く見られるが、省略。

(4) 中国語における南朝音が隋唐の漢音に変化したとする認識 = 定説このように、日本語には中国南朝から呉音が、そして隋・唐から漢音が伝わり、それが両方とも今に残っている。ところが、本場の中国では、漢音は残っているが、日本語の呉音の元となった南朝音は残っていない。

呉とは、中国華南の揚子江下流域を言う。中国では、《南北朝時代に華南の地を支配した南朝で用いられた音韻》を《呉音》と呼ぶ。ところが、この《南朝音》、すなわち《呉音》は中国に残っていない。そして、〔中国に《呉音》が残っていないのは、これが《漢音》に変化したからだ〕という。この解釈が日中の定説になっている。しかしこの定説には疑問があります。その考えをご理解頂くために、中国の歴史を見て頂きたい。

[3] 南朝音と隋・唐音の違い

(1) 中国の歴史 秦漢から隋唐へ

有史以来、中国の漢民族は北方遊牧民族の侵入の脅威に晒されてきた。秦 (B.C.21～210 年) の始皇帝が初めて華北・華南の全土を統一したとき、最初に行った仕事は《万里の長城》の建設であった。北方の異民族を漢の地に入らせないためである。《長城の建設

》と、これを維持して《異民族の侵入を阻止し続ける》ことは、漢民族にとって膨大なエネルギーを必要とした。しかし、漢民族が華北・華南を独占支配して生き抜くには、この仕事から手を抜くことは出来なかった。

この《北方異民族と漢民族の対立の構図》が中国の歴史を形成する。北方遊牧民族は長城の北を女房・子供を連れて移動する。移動の最中は、野菜なんかは自分で作る。羊肉だけでは生きていけない。しかし、土地が悪いからちゃんとした農業は出来ない。で、彼らにしてみれば、長城の内側は垂涎の的である。彼らは農業の出来る土地が欲しい、出来れば定住したい。だから侵入すると、農民を殺して土地を奪う。漢民族同士の争いではこうはならない。土地に張り付けられた農民の支配権を争うのであって、農民を殺したりはしない。異民族の侵入の場合はここが違う。

始皇帝が死ぬと漢に変わる。漢大帝国の支配は安定して人口は急激に増え、ピーク6000万人近くに達する。しかしその漢も、北方異民族の匈奴に押されて落ち目に向かう。政権が成熟して安定期に達すると後は落ち目に向かう。そのとき必ず北方の異民族が絡んでいる。中国の歴史はこの繰り返しである。

漢帝国が停滞期に入った所で、政権の実力者王莽が、改革を期待する声を味方につけて実権を握り、新（8～23年）を興す。しかし、圧倒的支持を受けて登場した王莽も、余りに出鱈目な政治を行ったために人口は半減する。その王莽も殺され、光武帝の後漢（25～220年）に代わる。人口も回復するが、前漢までは戻らぬところで、また落ち目に向かい、黄巾の乱（184年）で事実上消滅する。各地の軍閥が、いずれは自分が皇帝になるんだと税金を懐に収め、後漢の中央政府は収入が無くなり崩壊したのである。

この間に力を付けたのが黄巾の乱を制圧した軍閥の曹操である。曹操は侵入してきた北方の異民族を自分の部下に組み入れ、土地の所有を許して耕作させ、必要時に自分の軍隊として使った。これが屯田制で、この屯田制によって曹操は力を蓄える。このとき後漢最後の皇帝は有力者を頼って放浪していたが、曹操が見つけて保護し、最大限、大義名分に利用する。曹操が死ぬと、息子の曹丕が仕上げをする。この皇帝（獻帝）から禅譲を受けて魏を興したのである（220～265年）。これを見て、呉、蜀も独立し、三国時代になる。このとき、戦乱によって疲弊した人口は、漢の最盛時の10分の1の500万人程にまで落ちていたという。魏が半分の250万、呉が残りの3分の2の170万、蜀が3分の1の80万である。

漢民族の人口が減ると、北方で対峙する異民族との間の人口バランスが逆転する。国境は見渡す限り無人の荒野となり、そこへ大挙して北方の異民族が侵入して来る。曹氏の魏は、この北方異民族との戦い、漢民族の蜀、呉との戦いの中で、部下の実力者、司馬炎に乗っ取られ、晋に代わる（西晋王朝265～316年）。

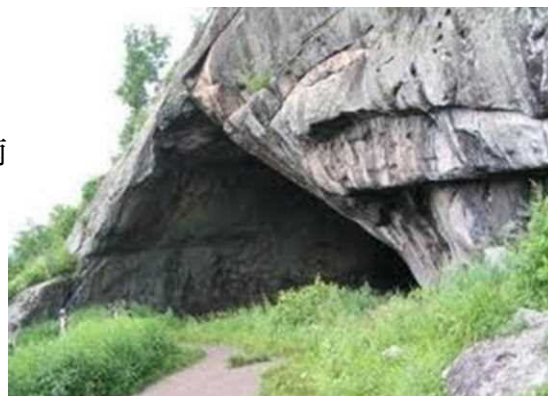
晋はやがて全土を統一するが（280年）、北方異民族に圧倒され、30年余で匈奴に倒される（316年滅亡）。難を免れた王室の一族は華南に逃れ、遊牧民に土地を追われた農

民も華南に逃れて合流し、東晋王朝（317～420 年）を建国する。漢民族不在となった華北には続々と北方異民族の五胡（匈奴・鮮卑・氐・羯・羌）が侵入して来て、土地の争奪戦を繰り広げる。これが五胡十六国時代である（316～439 年）。

この北方民族大移動の背景には、彼らの居住地の乾燥化、砂漠化があるようだ。彼らは元の土地に住めなくなったのである。華南では東晋王朝（317～420 年）が百年続くが、この百年間、華北では五胡十六国の殺し合いが続く。やがて華南の東晋は部下に乘っ取られて、宋王朝（420～479 年）に変わり、華北では鮮卑族の北魏が五胡の統一を果たす（439～534 年）。

以来、華北では鮮卑族の王朝が北方諸民族を支配し、華南では漢民族の王朝が漢民族を束ね、双方が全国制覇を期して対峙する。この南北対立の時代が南北朝時代と言われ（439～589 年）、北朝の隋が南朝の梁を滅ぼしてこの対立に終止符を打つ。

中国 大興安嶺『嘎仙洞』
北魏を建国した鮮卑族拓跋部の居住地にある旧墟



（２）日本の漢字導入の歴史

日本はこの南北朝時代、南朝の宋に朝貢し、北朝と交渉を持った形跡はない。そして日本には、南朝の呉音が律令から生活用語にまで入り込んでいる。特に仏教の経典などほぼ呉音で読む。ところが、中国では 589 年にその南朝が滅ぼされ、北方異民族の鮮卑から出た隋・唐の王朝が全土を支配する。日本は、『倭の五王』の最後の武王が 478 年に宋に遣使して以来、中国との国交を断っていたが、隋が中国全土を統一し、強力な統一国家を建設したのを見て、600 年に遣隋使を派遣し、続いて遣唐使を派遣して様子を見る。そして、その制度・文化に触れ、その先進性に驚き、これを取り入れようと躍起になる。

しかし、隋・唐では、南朝の呉音は消滅しており、漢音でなければ話が通じない。そこで奈良朝政府は、漢音を正音とし、唐から音博士を呼んで、漢音を教育する。そして、漢音をマスターしない者は遣唐使の随員にしない、留学生にも、留学僧にもしないと圧力を懸ける。こうして日本は漢音によって唐の文化・制度を取り入れる、と同時に、社会の上層部は唐に、そして漢音にかぶれていく。

一方、生活レベル、民衆レベル、仏教界では一旦浸透した呉音がそのまま残り、呉音・漢音が並存して現在に至っている。呉音・漢音がどの位の割合で残っているかは計算のしようもないが、呉音の方が多いとも言われている。ここまで呉音が浸透しているということは、その後の遣隋使・遣唐使の派遣による「漢音での交流」を考えれば、歴史にこそ残されていないが、南朝との間にもそれに劣らぬ「呉音での交流」があったと見なければならぬ。

（３）中国 南北朝から隋・唐にかけての歴史

日本では呉音と漢音の双方が残ったが、本家本元の中国では《南朝音、すなわち呉音》は消えてしまう。だから中国は、《自国の南朝音》を《日本の呉音》で研究する。そして言語学者は、《南朝の呉音がなくなって、隋・唐の漢音しか残っていないのは、呉音が漢音に変化したからだ》と見ている。しかし、前段で見た歴史からすれば、《発音が時間の経過とともにただ変化した》とは考えられない。そこを明らかにするために、もう少し中国の歴史を見る。

華北では五胡十六国が百年もの間 殺し合いを続け、439 年、五胡の一部族鮮卑の北魏が五胡と残存漢民族の全てを統一し、その統一を百年も維持する。その間、北魏皇室の「拓跋」氏は、徹底した漢化策を採り、その一環として、自分の鮮卑の姓「拓跋」も漢風の「元」に変える。そして百年後（534 年）、鮮卑族の北魏政権の実力者、宇文泰と高歓が、それぞれ、「元」氏の皇帝を傀儡に立てて西魏（535～557 年）と東魏（534～550 年）に分裂する。これは、宇文氏と高氏が傀儡の「元」氏の皇帝から禅譲を受けるための準備期間でしかなく、やがてそれぞれが禅譲を受けて北周（557～581 年）・北斉（550～577 年）に代わる。

さて、北方遊牧民族の鮮卑族の北魏が、次々と華北に侵入してきた北方異民族の五胡を統一したとき（439 年）、最初で最大の仕事となったのは、後からやって来る北方異民族を撃退して華北に入れないようにすることであった。北魏は万里の長城の南北に《鎮》と称する軍事拠点を幾つも設けて、大軍隊を駐留させる。〔《鎮》とは「鎮守府」のことで、日本でも旧海軍の佐世保鎮守府を《佐世鎮》と呼んでいる。〕

この政策は西魏・北周の宇文氏に引き継がれる。ところが北周の武帝が死に、息子の宣帝が皇帝に就くと、宣帝は直ぐに七歳の息子に譲位する（静帝）。これは皇帝の政務から免れるためであって、自らは天元皇帝と称し、皇后を五人立てて遊び呆ける。で、政治の実権は自ずと実力者で宣帝の筆頭皇后の親である楊堅の許に転がり込む。宣帝が在位二年で死ぬと〔多分、楊堅に殺されたと思うが〕、楊堅は直ぐに九才の静帝から禅譲を受けて皇帝に収まり、隋を興す。この楊堅がついに南朝梁を滅ぼし、全土を統一する。

しかし、楊堅の息子の煬帝は《大運河を建設》し、《高句麗に三度遠征し失敗》して、その負担で民心を失う。ここで李淵が挙兵し、煬帝が部下に殺されるのを見て唐を建国する。隋は大運河を造って滅び、唐はこの大運河のお陰で大発展する。

面白いのは《西魏・北周の宇文氏》、《隋の楊氏》、《唐の李氏》は、皆、鮮卑族で、西魏北境の前線基地の一つ《武川鎮》の同僚であったことである。《北周の初代皇帝宇文泰の父宇文泰》と、《唐の初代皇帝李淵の祖父李虎》は《西魏の柱国大將軍》である。柱国大將軍とは、国の柱となる大將軍で、6 人いる。その下に 12 人の大將軍がいて、《隋の初代皇帝楊堅の父楊忠》は《西魏の大將軍》である。《李淵の母》と《楊堅の妻》は実

の姉妹で、《西魏の柱国大將軍独孤信の娘》である。みんな《武川鎮》での仲間だったのである。

整理すると、北方異民族の五胡は、西晋を倒してから（316 年）、十六国時代の 100 年余華北で相争い、これを鮮卑族の北魏が統一する（439 年）。《北魏、西魏・東魏、北周・北齊の鮮卑族の皇室》は 150 年間 華北を支配し、隋が全土を統一してからは（589 年）、《同じ鮮卑族から出た隋・唐の皇室》が 300 年以上中国全土を支配する（907 年まで）。

つまり、《鮮卑族の皇室》が、450 年のもの間、中国を支配したのである。一般には、隋が華北から出たことは知られているが、北魏も、西魏・東魏も、北周・北齊も、隋も唐も、その皇室はみんな鮮卑族だというのは、余り知られていない。

中国 大興安嶺『嘎仙洞』

鮮卑族拓跋部の北魏の原住地にあり、《石室》と呼ばれていた。



（4）漢文化の担い手の交代

さて、五胡の内の一民族に過ぎない鮮卑が、何でここまでの大仕事が出来たのであろうか？その原動力は、一体どこにあったのだろうか？ずっとここを考えて来たが、一言で言えば、徹底した《漢化政策》と、《民族間の通婚政策》であったらうと思う。

北魏の凄いのは、自分たちの鮮卑語を捨てて、宮廷で中国語以外を話すことを法律で禁止してしまったことである。五胡はそれぞれ独自の《言語》を持っていた。が、《文字》は持っていなかった。だから、《五胡》と《文化の進んだ漢民族》の全てを併せ支配するには、《中国語と漢字》を採用するという選択肢しかなかったらうと思う。

その上に鮮卑は、遊牧民の特徴であった筒袖も禁止して漢服を着用させ、部族それぞれの習俗も捨てさせる。そして、《通婚を進める》ため、《同姓間の結婚》を法律で禁止する。この《鮮卑の政策》があったればこそ、《華北の言語・習俗の異なる五胡》を融合することが出来、《華南の漢民族》をも呑み込んでしまうことが出来たのである。

だから、《隋・唐による全土の統一》とは、《五胡と漢民族の混血による新しい漢民族の国家の誕生》であったのである。

しかし、反面、これは鮮卑ほかの北方遊牧民族にとって見れば、哀しい結末でもある。

北魏を建設した太武帝には《鮮卑の誇り》があった。

エピソードを一つお話ししよう。皆さんは最近発見された中国の観光名所《嘎仙洞（かっせんどう）》という大洞窟をご存知だろうか？日本では未だ余り知られていないよに思う。439 年に太武帝が北魏を建設すると、首都の平城に周辺の国がお祝いを言い朝貢し

て来る〔このとき、日本の『倭の五王』は北朝の北魏にではなく、南朝の宋に朝貢していた。〕

その時、平城の東北 2000 kmからやって来た烏洛侯国（戦前の満州）の使者が、その国の西北に《北魏の先帝の旧墟》で『石室』と言われる洞窟のあることを報告する。太武帝はもう、先祖のこの『石室』を知らなかったが、喜んで人を派遣し、この洞窟の壁に祝文を刻させる。この事件とその祝文の文章が、魏収（506～572 年、北魏・東魏・北斉の人）の『魏書』に記されている。

ということは、この祝文の刻まれた洞窟を発見できれば、鮮卑の居住地が知られることになる。こう考えてその洞窟を探していた内蒙古自治区（旧満州）の考古学者が、ロシアとの国境に近い密林の中にある《嘎仙洞》に狙いを付ける。この洞窟は、奥行き 90m、幅 30m、高さ 20 数 m という巨大なもので、数千人は入れるという。そして、1980 年、調査すること 11 カ月目の夕方、入ってすぐの壁に、差し込んで来た夕日の中、『太平真君』の文字がうっすらと浮かび上がったという。

『太平真君』は北魏太武帝が建国したときの年号である。そしてそこに、《高さ 70 cm、幅 120 cm、201 文字からなる『魏書』にあるとほぼ同文の祝文》が発見されたのである。



『嘎仙洞』祝文北魏『太武帝』はこの祝文で、自らの皇祖先を「可寒（カガン）」と呼ぶ。

「可寒」は遊牧民族の皇帝の称号（可汗、カカン、カーン、ハーン）の最古のもの。

日本で『稻荷山古墳出土の鉄剣』の錆びの中にレントゲンで「獲加多支鹵大王」の金象嵌銘が発見され、百年に一度、いや千年に一度の大発見と騒がれたのが 1978 年だから、1980 年の《嘎仙洞》の発見はその二年後のことになる。

日本にも、《文献》に記された事物と奇跡の一致を示した《遺物》として、従来から

1. 志賀の島発見の『漢委奴国王』金印〔『後漢書』建武中元 2 年、「光武賜うに印綬を以てす」の記事に一致〕

2. 石上神宮所蔵の『七支刀』

〔『書紀』神功皇后紀 52 年条の「七枝刀」の記事に一致〕の二つが知られているが、新たに、この『稻荷山鉄剣』銘にある大王の名「わかたける」が、日本古代史学会の定説派により、雄略天皇の固有名「わかたける」に一致するとされたのである。

しかし、実はもう一つある。これはまだ、定説派の学者にも、九州王朝史観の研究者にも知られていない。隅田八幡宮所蔵の『人物画像鏡』銘の「おほと（男弟）」が、『日本書紀』継体天皇の名「おほと（男大迹）」と一致すると証明されたのである。

そしてこの発見は、《「隅田鏡」の「男弟王」の王朝》こそ、《『二中歴』に言う「31の古代逸年号」を持った王朝》であり、と同時に《『倭の五王』の王朝》であるという発見に繋がっていく。（2011年7月の久留米大学公開講座より）。本論に戻る。

鮮卑を初めとする五胡は、自分たちの民族の言語を捨て、風俗習慣を捨てて、ひたすら漢人に成り切ろうとした結果、北魏を興した太武帝が持っていた《自らの民族に対する誇り》までも失ってしまう。隋の皇室の楊氏と、唐の皇室の李氏は、終には、自分の先祖は漢民族の出であって、鮮卑のような卑しい出ではないと言い張るようになる。

征服され、強制されてのことではない。漢民族を征服していながら、自ら進んで征服した漢民族に成り切ろうとした結果なのである。五胡の諸民族がかって用いた言葉は全て消滅し、騎馬で草原を駆け抜けた筒袖の服も習俗もみんな忘れられてしまった。

ということは、結局は、鮮卑と北方遊牧民族の方こそが、漢民族の文化に呑み込まれ、征服され、消えてしまったということに他ならない。かつての漢民族は征服され、征服した北方民族と混血させられ、民族は事実上交代した。しかし、《担い手》が変わっても、残ったのは《漢民族の文化》であった。

それはそれでいいのかもしれない。そして、それしかなかったのかもしれない。しかし北方遊牧騎馬民族にとっては、哀しい結末ではなかろうか。さて、この《担い手が交代した》という処に《話のカギ》がある。長々と中国の歴史をお話したのはそのためである。歴史家も、言語学者も、この歴史の本質を見抜くことが出来なかったのである。

華北の鮮卑ほかの北方異民族は、《中国語》を学び取って自分のものにした。《漢字》も、《文法》も、自分のものにした。

しかし、どうしても真似することの出来なかったものがある、《発音》である。

日本の江戸っ子が、「火消し」を「し消し」と発音して、自分では「ひ消し」と言ったつもりでいるようなもの、東北地方で「す」と発音して、本人は「し」と言ったつもりでいるようなものである。北方の異民族は、漢民族の（マン、マク、ミ、ムを真似して、その通りに発音しているつもりでいるのに、（バン、バク、ビ、ブ）になってしまう。持って生まれた《発音の癖》、これだけはどうしても抜け切れなかったのである。

だから、《日本人が呉音として学び取った音韻》の大元の音韻とは《漢民族の音韻体系》であり、《漢音》とは《北方異民族がこれを真似たときの音韻体系》だったのである。これが《解釈》である。《呉音が漢音に変化したのではなかった》のである。

そして、《鮮卑の隋、唐王朝》は全土を支配するのに、《自分たちの発音》を力で強制し、数で圧倒して一般化し、この発音こそ中国正統の発音であるとして《漢音》と呼んだ。そしてそこに生まれた子供たちは、生まれながらにして漢音の音韻体系を身につけていく。

一方、《元々の漢民族の発音》は、南方の田舎の呉で用いられていた発音、《呉音》であるとして卑しまれ、使われなくなり、消滅する。この《漢音による中国語を母国語とする混血民族》は、《新たな漢民族》として強大な国家・唐を築き、やがて 5000 万人の人口を回復して、三百年の繁栄を謳歌する。

(5) たまごとたばこ（久留米地名研究会より）

ある食卓でのこと、同席していた宮崎大学グループの中国人留学生が、生「たまご」を見て、「たばこ」と言ったのである。一瞬首をかしげたが、直ぐに「たまご」のことと理解した。彼女は日本に来て、「たまご」と教えられ、自分では「たまご」と言っているつもりなのに、「たばこ」と発音しているのである。これこそが、《隋・唐代までに形成された漢音による中国語を母国語とする混血民族》、すなわち、《ここで生まれた新しい漢民族》の持って生まれた発音習慣なのであり、これが、《m音からb音への非鼻音化》現象であり、《g音からk音への濁音の清音化》現象なのである。

[4] 日本語のm音とb音の交代現象

さて、《中国の呉音と漢音》が怪しいということで見えて来たが、《日本語のm音とb音の入れ替わり現象》とはその本質の違うことが分かった。日本人は《呉音のm音》も、《漢音のb音》もはっきり区別し、双方ともに発音することが出来る。だからこそ、《m音とb音の交代した語》が双方ともが残っているのである。しかし、日本に残されたこの現象が、《中国の呉音と漢音》に関係がないとは思えない。ではどのように関係し、《日本語のこの現象》はどうして生じたのであろうか。

日本が繁栄する強大な国家・唐と出会い、その文化に圧倒されると、日本にどうということが起きるであろうか。漢音を学ばない限り、もう新生中国唐と接することは出来ないし、日本で出世することも出来ない。

となれば、《日本の最上層部》、《権力と文化の最先端》にいる人たちにとって、呉音はもう古臭いものでしかなくなってくる。（バン、バク、ビ、ブ）としゃべっているうちに、（マン、マク、ミ、ム）の発音はどうにも田舎臭く思えて来る。それに、音博士の先生や、唐からやって来た人たちは、日本語の（ま、み、む、め、も）を発音出来ない。どうしても、（ば、び、ぶ、べ、ぼ）になってしまう。

それを真似して、日本語の（ま、み、む、め、も）を、（ば、び、ぶ、べ、ぼ）に変えてしゃべってみる洒落者が現れる。そういう人間がいつの時代にもいるもの、そしてそれがまた新鮮に聞こえて、結構、受けた。受けなきゃあ、（すめろぎ、すめらぎ、すめらみこと）までが、（すべろぎ、すべらぎ、すべらみこと）になったりはしない。《神聖なる至上、天皇の呼び名》なのだから。そんなこんなで、《日本語のm音をb音に言い換える》のが流行になって来る。社会の最上層部でのこの流行は、やがて、社会の末端にまで浸透する。そして、この風潮は、奈良、平安、鎌倉と中世まで続き、《日本語の一パターン》として定着したと考えられます。これが《日本語、すなわち倭語に、m音とb音を言い換えた言葉が同居する》という現象なのである。参照：（2012.1.12）久留米地名研究会